[27]

氏　　名	高（こう）　絵景（えけい）
博士の専攻分野の名称	博士（文化交渉学）
学　位　記　番　号	東アジア文化博第 78 号
学 位 授 与 の 日 付	2022 年 3 月 31 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学　位　論　文　題　目	池大雅の書画をめぐる文化交渉研究 ―中国の「詩書画三絶」と日本における受容
論　文　審　査　委　員	主 査　教　授　奥村　佳代子 副 査　教　授　石崎　博志 副 査　教　授　陶　徳民 専門審査委員　名誉教授　中谷　伸生

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、文化交渉学の視点から、日本の文人画の代表的画家とされる池大雅の書画作品を中心に、従来の大雅研究では、それぞれ別個に研究されてきた「書」と「絵画」を統合し、研究が遅れている書の芸術性および書と絵画の関連性を考察し、その上に日中における「詩書画三絶」に関する諸問題を論じたものである。一人の画家における書と画の研究は珍しい。目次は次の通りである。

序論
第一章　池大雅の初期書風に見られる統一感
第二章　変化する自己探求の中期書風－《千文字》の制作を中心に
第三章　大雅の学書観念をめぐって
第四章　大雅の扇面画制作
第五章　『東山清音帖』をめぐって
第六章　池大雅の「詩書画三絶」をめぐって
終章

これまで池大雅の研究は膨大にあるが、それらのほとんどが絵画を中心になされ、21 世紀に入っても、書に関する研究は絵画研究の一割にも満たず、現在はやや停滞している傾向にある。かつて犬養木堂は「大雅出でて、日本の書は崩れた」といい、大雅は、日本書道史における異才であるだけではなく、近代書道史の上でも革新的意味を持つ書家である

と考えられた。数少ない書に関する研究の中で、注目に値するのは、松下英麿氏の『池大雅の書』、笠嶋忠幸氏の『池大雅の学書法試考』、鄭麗芸氏の「逸情書論―中国書法の日本的受容」などである。しかしながら、大雅にあっては、書風は千変万化し、同じ時期でも風格が全く異なる作品が制作され、他の多くの書家と比較すれば、書風の展開を把握しにくいため、以上の先行研究においても、主に概説的な内容となり、作品に基づく文字の造形、運筆および墨使いなどについては、具体的な分析が行われなかった。高絵景氏は、こうした重要な研究課題について挑戦している。

従来の大雅研究においては、書に関する研究が不十分なまま、大雅の制作における「書画一体」に関する研究がなされ、それらの研究では、ほぼ絵画を主体とし、書は副次的な対象に過ぎない扱いであった。そのため、書の芸術性および書と絵画の関連性が見落とされ、研究成果が一面的になる傾向があった。また、職業的な文人画家であった大雅は、生計のために、絵画の制作にあたっては、市場（依頼者）の注文に支配されがちで、あまり評判にならなかった書は、相対的に創作の自由度が高く、書作品から大雅の創作理念や意識をより明白に捉えやすいと考えられる。こうした問題意識を踏まえて、綜合的な大雅論を展開したのが本論文の特色である。本研究は、池大雅の書画を考察するため、今までの文献資料学、図像学、美術史学などの視点も踏まえながら、文化交渉学の研究方法によって、一国の国境を超えて東アジア全域に視野を広げて、研究対象である池大雅を中心に、日本における中国の書と絵画の受容について追及した上に、大雅によって成し遂げられた革新的な文人画創作に関する諸問題を究明している。

研究は主に次の三点について考察がなされた。まず、大雅の書の研究において、中国からの影響とそれによって生み出された様式に関する重要な考察である。ここでは、大雅を取り巻く江戸時代の文字環境、あるいは中国製の法帖に限らず、和刻法帖も含めながら、中国の書法受容の様相を解明し、その上、大雅とその文字環境との親密性をめぐる関係性について解明している。具体的には、仮説の結論を検証するために、作品を取り上げる研究方法を避け、大雅 30 歳から 50 歳頃の時期（1752～1773）に制作された七つの《千字文》（五つは楷書体、二つは草書体）を研究対象とすることで、複雑な書風の展開を簡略化し、大雅の抽象的な学書の過程を一層具体的に考察している。さらに、江戸時代における千字文の普及状況を考察し、学書とされた千字文の書跡資料と大雅におけるその影響を分析し、中期の書風が複雑に変化した原因を明らかにしている。また、江戸時代の前・中期において中国の臨書観念の受容様相を明らかにした上で、大雅と書家の中井董堂を比較しながら、異なる臨書観念が個人の作風を形成する場合、どのような影響を与えることになったのかを検討している。

続いて、大雅の扇面画『東山清音帖』を中心に、扇面画における文人画制作を検討し、晩期作品における書・詩・画の関係を究明した。ここでは『東山清音帖』における「瀟湘八景」という中国の伝統的な画題の受容を検討した上で、そこに表出された不思議な詩書画の関係を解釈するため、大雅晩期の作品を採り上げ、大雅の文人画における様式をそれぞれ考察し、そこに表出された大雅の斬新な「詩書画三絶」の観念について検討している。要するに、詩・書・画の関係は、従来の３者は一致しているという説、またそれぞれ補い合うという説

とは異なり、不即不離という関係であり、大雅が晩年に禅宗の影響を受け、形式主義に対して抵抗し、その結果、絵画制作が自由自在となり、近代美術に見られる「遊びの性格」が表明されたと考えられる。

以上、池大雅研究で積み残されてきた「書」と「画」をめぐる研究の一端が明らかにされたと考えられる。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

本論文は、池大雅が制作した「書」と「画」の関係に言及し、両者の関係から大雅芸術の本質的性格を明らかにするものである。その際、まず大雅の書について研究を深め、大雅の書を初、中、晩期に分け、それぞれの書風の特徴を検討することで、大雅の書画制作の全体像を把握することを狙っている。27 歳から 40 代の前半頃は、大雅の書風は、緊張や束縛といった印象を与える段階で、晩年の悠然とした雰囲気を漂わす段階に至るまでの過渡期だと述べられている。この時期に大雅は、多様な書風を試しながら、各書風、各書体を熟練した技法で運用している。高絵景氏は、先行研究の少ない大雅の書について独自の分析と解釈を行い、大雅芸術の全体像に迫る力作を書き上げた。本論文のタイトルに問題があると発言した審査委員もいたが、江戸時代に流布した「詩書画三絶」という中国の理想の言葉を自家薬籠中のものにしようと辛苦した大雅らの文人たちの制作理念を明らかにする点で、本論文のタイトルは適切であったと考えられる。

第一章から第三章においては、大雅中期の臨書に焦点を当て、中国からの影響と大雅の様式についての考察を行なっている。すなわち、大雅を取り巻く江戸時代の文字環境、あるいは中国製の法帖に限らず、友人の韓天寿との関係も含めた和刻法帖にも言及しながら、中国の書法受容の様相を解明し、その上、大雅とその文字環境との親密性をめぐる関係性について新しい研究を展開した。それによれば、大雅が学書において啓蒙とした手本は、欧陽詢の《九成宮醴泉銘》、《皇甫誕碑》のあたりだと考えられ、欧陽詢の影響は、大雅の 40 歳前後まで続いたと指摘し、欧書の緊張感から解放される時期は、大雅の書が大成期に入った重要な転換点にあたっていると主張する。本論文において、中国の各時代における臨書の観念や理想を整理し、臨書観念の転換期が明末の董其昌によって提唱された臨書理論にあるとし、従来の規則を打破し、新しい構想、すなわち「臆造性臨書」を発展させたことを明らかにした。こうした中国の書法をうまく整理した高絵景氏の解釈は、非常に手堅い研究になっていると評価しておきたい。

第四章から第六章までは、大雅の最晩年に制作された『東山清音帖』を研究対象として、これまでほとんど研究されなかった大雅の扇面画制作を考察している。『東山清音帖』の研究においても、従来は書と画を比べて解釈する研究はほとんどなく、その点で本論文の研究

は、独創的であると思われる。書と絵画の造形的な分析を通じて、八枚の絵画に添えられた書が、用墨、用筆さらに結字など、大雅は、心を込めて画題や画面構成に応じながらそれらを調和させ、視覚的な統一感を求めたことが明らかにされている。以上の問題を考察した上で、般若波羅蜜心経の制作、およびが抽象化された書と画をめぐって、禅宗の「空無」という思想、および白隠の禅画が大雅晩期の人間的性格や藝術的境地に大きな影響を与えたと結論している。こうした研究は大変難しいもので、それに果敢に挑戦した高絵景氏の研究姿勢を高く評価したい。

要するに、従来の大雅研究では、「書」と「画」がそれぞれ別個に研究され、両者の関係とそれに基づく大雅芸術の全体像が見えにくくなっているが、高絵景氏は、こうした困難な問題を扱いながら、書家であり画家である大雅の新しい解釈を行った。大雅が創作した書画をめぐる独創的な研究は、日中の文人画と文化の相違点について、根本的な関係性を明らかにしている。

本論文は、江戸時代の文人画全体にわたる広い視野には若干欠けるところがあるが、それは若い研究者にとってはやむを得ないことで、将来の飛躍を期待したい。また、結論部が、大雅の特性を明らかにする点でいささか鋭さを欠くという審査委員からの適切な指摘もあったが、従来の池大雅研究ではほとんどなされなかった「書」と「画」両方の独創的な研究を行った点は高く評価できる。高絵景氏は学会発表や論文などの業績も十分であり、これからも学術分野での活躍が期待される。

よって、本論文を博士論文として価値あるものと認める。